「在学生調査」からみた長崎短期大学の教育

～ 全国調査との比較から見えた本学教育の傾向と対策 ～

A Survey of Current Students Views on the Quality of Education at Nagasaki Junior College

- Comparing results with other colleges in Japan -

安部　恵美子・小嶋　栄子

Ⅰ．はじめに

高等教育ユニバーサル化の進行にともなって、短期大学の入学者の質は大学以上に多様化している。入学者の多様化の中で各短大には、自らの教育理念に基づく「個性化・特色化」と、短期大学士の学位保証という観点から要請される「教育の標準化」の調和に配慮することが求められている。そのためには、現在の教育課程や学生支援の見直しや充実が必要である。

短大教育の特徴は、「教養教育と専門教育の適度なバランス」と「人間教育を基本とした実務教育・職業教育」であり、短大で育成する人材像は「創造性と倫理性を備えた、真に社会の中心的役割を支える良質で勤勉な社会人であり、わが国の人材立国を支える中堅実務者」と定義（注：2008 日本私立短期大学協会）されている。

こうした定義に基づき短期大学教育の実効性を高めるためには、現時点での達成度を検証してさらにより良く達成するための課題を設定することが求められる。近年の大学改革の流れの中で、短期大学も、初年次教育の導入、カリキュラム改革やＦＤ活動には取り組んできたが、教育を評価する手法に乏しく、達成度すなわち、教育成果を検証するためのデータの蓄積は進んでいない。教育の達成度を評価するには、教員の主観的な経験ではなく、客観的データにもとづいた学生の成長の測定が求められる。学生が短期大学でどのように成長していくのか、成長の測定はどのように行なえばよいのかを示す継続的な学生調査の開発は、充分にはなされていない。つまり、短期大学在学中の成果と教育課程の関連性を明らかにした研究は、四年制大学と同様、わが国ではこれまではほとんど見られなかったのである。

筆者らの研究プロジェクト（平成 21 年度科学研究費補助金「短期大学教育と地域ステークホルダーに関する総合的研究」（基盤研究Ｂ課題番号 21330195、研究代表者：安部恵美子）では、平成 21 年 4 月に短期大学に入学した学生を対象に、入学前の学習経験や生活、短大への入学理由、短大での学びに対する意欲、学生生活の実態と満足度、短大卒業後の進路希望及び、短大教育に対する評価に関する質問項目で構成された「短大在学生調査」を設計した。短期大学間や、学科専攻分野間の比較が可能となるように、全国の短期大学に参加を募り、結果的に 48 短大 99 学科 7,859 名のデータを集めることが出来た。この調査の分析結果を素に、短大生の学習や生活に関する意識や実態をとらえ、短大での学びの実態を規定する要因（入学前の学習経験・短大の学習モードなど）や、短大での学習成果形成プロセスの具体を明らかにすることを目的としている。

なお、今後、本研究プロジェクトでは、同一の対象者 (21 年度入学生) への「卒業時質問紙調査 (23

年2-3月実施)」と「卒業生質問紙・インタビュー調査（23年秋以降に実施）」を予定しているが、それらの調査結果を総合的に分析することを通して、学生調査という「間接評価」に基づく短大教育の成果の測定と、教育の到達目標の設定を目指している。

本稿では、この「短大在学生調査」について、データ全体（学科専攻分野別）と、本学長崎短大の学科別（食物・保育・英語）および留学生の集計結果を報告し、短大在学生の学習・生活実態と、本学学生の特徴を明らかにし、短期大学教育の改善の方向性を探ることとする。

２．短期大学在学生調査の概要

1) 調査の実施：平成21年9月～11月　調査対象短大毎に「質問紙調査」の一斉実施・回収

2) 調査の対象：全国48短大（北海道３　東北３　関東６　東京３　中部　９　近畿６
大阪２　中四国１ 九州沖縄１７）の
平成21年度入学生　7,859人（女性7,465人　男性374人）

3) 調査対象の属性

表２－１　専攻分野別の割合

	人文	社会	教養	工業	農業	保健	家政	教育	芸術	地域総合科学科	不明
N	776	366	99	112	99	320	1947	2778	139	1213	10
%	9.9%	4.7%	1.3%	1.4%	1.3%	4.1%	24.8%	35.3%	1.8%	15.4%	0.1%

※本稿の専攻分野別の分析は「人文・教養」「家政」「教育」「地域総合科学科」
「社会」「保健」を対象とする

３．入学前の学習や生活

３－１　全体集計結果

卒業した高等学校は、全体では、普通科が7割（69.1%）を占め、商業科9.0%、総合学科8.3%と続く。家庭科出身者（全体の4.6%　358人）の76.3%は、教育と家政分野の学生であった。また、全日制の出身者が97.3%を占め、年齢は18-19歳が95.5%と高校卒業直後に短大へ進学した者がほとんどであった。

高校時代は、授業には出席して試験前には一生懸命に勉強するが、予習復習の習慣が確立している者は15%である。また、1週間の総勉強時間は、2時間に満たない者が半数を超える(57.2%)。専攻分野別では、人文・教養分野の学生は、他の分野に比較して予習復習の習慣が身についている者が多かった（22.3%）が、地域総合科学科では、6割を超える者が予習復習に熱心に取り組んでいない。

さらに、高校での勉強を「面白くない」「将来役に立たない」「何のために勉強するのかわからない」と感じていた者がそれぞれ、21.8%、22.4%、18.1%で、入学者の2割は、高校の学習に対して否定的な見解を持っているが、その傾向は、地域総合科学科で強い（23.7%、24.3%、23.1%）。逆に、3分の1が高校での学習を肯定的に捉えている。4割の“どちらでもない”を挟んで、短大進学者の学習に対する意識は、多様化している。

授業以外の活動に関して、全体では「友達との交際（5段階評価4.3　以下同じ）」や「趣味（4.0）」に特に力を注ぎ、また、「サークル・クラブ・部活動(3.5)」にも6割近くが熱心に参加していた。また、3分の1の学生が「アルバイト(2.5)」に熱心に取り組んでいたが、「ボランティア活動(2.4)」には2割の学生しか取り組んでいない。学科分野別では、「サークル・クラブ・部活動」は教育分野で高

く、地域総合科学科や人文･教養で低い。また、「実習やインターンシップ等、職場での就業体験 (2.9)」や「ボランティア活動」も、教育分野がより経験しており、「アルバイト」は、地域総合科学科の経験率が高い。

本学の集計結果

本学の学生は、調査全体と比較すると、高等学校普通科出身者の割合が低い。全体の平均に近いのは、製菓（62.5％⇔ 69.6％）のみで、英語（41.0％⇔ 75.9％）調理（(38.1％⇔ 69.6％）保育（27.6％⇔ 64.4％）と、平均よりもかなり低い割合であることは大きな特徴である。

高校時代の学習に対する取り組みについては、3 学科は調査全体との間で大差は見られないが、留学生では、1 週間の授業以外の学習時間は 1 日 3 時間以上の者が 8 割を越えており、日本の短期大学進学者とは明らかに異なっている。四年制大学生の受験期の 1 日の平均勉強時間は 4.5 時間（Benesse 教育開発センター研究所報 Vol.51「大学生の学習・生活実態調査報告書」2009）であるが、同じくらいの勉強時間である。つまり、留学生の高校時代には、日本の短大生よりよく勉強していたのである。その結果、6 割以上の学生は、予習復習の習慣が身についている。日本人学生では、食物・保育の学生の 4 人に 1 人は、授業以外の勉強はまったくしておらず、また、予習・復習の習慣がついている学生は全体の 15％程度で、大半の学生は予習復習の習慣が身についていない状態で短大へ入学している。英語科でも、高校の時には 2 割の学生しか予習復習に力を入れてはいないので、高校で履修する英語に関する知識の定着が不十分な、また、基礎学力不足の学生の割合が高いと想像できる。

しかしながら、高校の学習に対して否定的な考えを持つ学生の割合は、日本人学生・留学生共に調査全体よりも低く、「面白くない」「将来役に立たない」「何のために勉強するのかわからない」と高校時代に感じていた者はそれぞれ 17.5％、14.9％、11.8％（以上、日本人学生）、8.1％、2.7％、10.8％（以上、留学生）であった。本学の日本人学生が、調査全体よりも否定的な見解を持つ者が少ない理由の１つとして、普通科出身者の割合が低いことが考えられる。つまり、本学の学生には専門高校や総合学科の出身者が多いが、その教育課程は、職業と結びつた資格の取得のための勉強や職場体験などが数多く取り込まれ実学的な要素が強い。生徒が学習の効用を意識する機会が、普通科よりも多く提供されているのであろう。

専門高校や総合科学科出身の学生の割合が高い本学では、「学校の勉強に熱心に取組んだことがない」し、「勉強の仕方がわからない」けれども、「勉強すれば将来の職業に繋がる」ことや「高校で経験した実学型・体験型の学習は面白く・役に立つ」ことを理解している学生が多いのではないかと思われる。このことは、高等教育機関の職業教育の方法論の開発のためには、専門高校や総合学科を持つ高校との高大連携が重要な鍵になることを示唆している。

また、留学生の場合は、日本へ来る準備のための勉強に時間を費やし、学校で学ぶことが将来に繋がることを自覚する高校時代を送っている。すなわち、日本人学生に較べて留学生には、勉強することが留学という目的のための手段として自覚されていたことが窺えたのである。

さらに、授業以外の活動の中では、「アルバイト」への取組みが全体よりも 1 割程度低い。これには、高校生のアルバイトの場が限られているという地方事情の影響が考えられよう。学科間で比較してみると、「実習やインターンシップ等、職場での就業体験」と「サークル・クラブ・部活動」については、保育学科と調理コースの学生が、より力を注いでいた。これも、実習やインターンシップの盛んな専門高校等の出身者が多いという 2 学科の特徴を反映しており、彼らが、受験勉強に追い立てられることなく、サークル･クラブ･部活動に力を注いだ高校時代を送っていたことが推測できる。

表３－１

		全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	製菓	調理	教育	保育学科	留学生
Ａ６－ａ：高校の勉強は	平均値	3.2	3.3	3.4	3.5	3.2	3.1	3.3	3.0	3.2	3.3	4.0
	おもしろくない（1．2）	21.8%	17.5%	17.3%	12.8%	22.6%	26.3%	25.0%	19.0%	21.6%	15.6%	8.1%
	おもしろい（4．5）	38.2%	44.2%	46.9%	53.8%	38.6%	39.5%	54.2%	23.8%	37.8%	41.6%	67.6%
Ａ６－ｂ：高校の勉強は	平均値	3.2	3.5	3.3	3.6	3.2	3.1	3.3	3.2	3.3	3.7	3.8
	将来役に立たない（1.2）	22.4%	14.9%	20.8%	12.8%	22.8%	28.9%	20.8%	30.0%	21.5%	9.1%	2.7%
	将来役に立つ（4．5）	38.5%	54.5%	43.9%	56.4%	38.6%	36.8%	37.5%	45.0%	39.5%	62.3%	54.1%
Ａ６－ｃ：何のために勉強するのか	平均値	3.3	3.6	3.4	3.6	3.3	3.2	3.1	3.7	3.4	3.8	3.4
	わからなかった（1．2）	18.1%	11.8%	17.1%	10.5%	18.0%	23.7%	25.0%	14.3%	17.0%	6.5%	10.8%
	わかった（4．5）	44.0%	54.2%	48.4%	55.3%	44.8%	42.1%	33.3%	66.7%	43.9%	59.7%	45.9%

４．入学前の期待と志望動機

４－１　全体集計結果

入学前は、高校とは違う「自由な雰囲気（5段階評価の期待度が4.1　以下同じ）」の中で「興味のある分野の勉強(4.2)」や「将来の職業に役立つ勉強(4.3)」をすることや、「新しい友達との出会い(4.3)」を強く期待していた。また、「サークル･クラブ･部活動での活躍(3.0)」「ボランティア活動(2.7)」よりも、「趣味活動(3.7)」「アルバイト(3.6)」といった、学外での活動に対する期待度が高かった。

１年前に、現在在学中の短大が第一志望だった者は、約半数で、他の短大を含めて短大を進学先に決めていたのは6割弱であった。その割合は専攻分野間で異なり、教育(67.0%)、保健(64.8%)で高く、人文・教養(45.6%)で低かった。

短大への進学理由は「学びたい分野があった(64.0%)」「資格・検定取得のため(60.8%)」が多いが、「自宅から通える(37.4%)」「就職に有利（34.8%）」も３割を超えている。短大卒業生調査(注１)と比較すると、在学生の方が「就職に有利」が11.7ポイント、「学校の場所や施設設備などが良い」という理由が7.8ポイント多い。このことは、短期大学で近年、職業教育や就職支援、また、施設設備面での充実が図られていることを示唆している。

また、親や友だち、高校の教師に勧められて進学したという理由も在学生の方が多い。逆に「希望の学校に進学できなかったから」「自分の学力に合っていたから」という理由は、卒業生の方が多い。在学生の85%は、推薦･ＡＯ入試などで入学している。そのため不本意入学者は減少し、同時に、短大に学力で入学するという意識も低下している。自分の興味関心に合致し、将来の職業に役立つかどうかが進学先決定のポイントであり、身近な人々からの意見も参考にして進学していることが分かる。さらに、「自宅(親元)から通える」と「経済的理由」の選択割合が、卒業生よりも在学生が高いことは、近年、短大への進学理由に家庭の経済状況の影響が強まっていることを示している(表2)

専攻分野別の進学理由を見ると、教育(72.8%)で「資格･検定取得のため」が高く、「編入制度があったから」は、人文・教養(16.3%)で高かった。また、地域総合科学科では「早く社会に出られる」「より教養を身につけられる」「学力に合っていた」以外の理由の選択率は、すべて全体よりも低いという結果であった。

４－２　本学の集計結果

「自由な雰囲気（4.1）」の中で「興味のある分野の勉強(4.2)」や「将来の職業に役立つ勉強(4.3)」をすることや、「新しい友達との出会い(4.2)」を強く期待する傾向は、全体結果とほぼ同様であった。また、「良い先生との出会い(3.9)」に対する期待が全体よりも高く、期待する学生の割合が、短大平均よりも２割近くも多かった。また「人として教養を深めること(4.0)」対する期待も短大全体より１割多い学生が持っており、特に、保育学科では16%も多かった。

また、留学生の期待度は、ほとんどの期待度項目で日本人学生に較べると低かった。この理由については、入学前の期待度を答えるこれらの質問項目には、調査時点における短大生活に対する満足度が反映される可能性が示唆される。

1年前に、本学への進学を決めていた学生は53.8％であり、他の短大や四年制大学が第一志望だった者の割合は全体よりも低いが、専門学校が第一志望だった割合は全体の2倍である。さらに、食物（調理9.5％・製菓16.7％）のみならず、むしろ、英語（17.9％）の学生の1年前の第一志望が専門学校だったことは大変興味深い。また、進学か就職かの選択も含めて「まだ、迷っていた」者の比率も高い。家庭の経済状況の影響があると思われる。

本学日本人学生の短大進学理由で最も多かったのは、「学びたい分野があった(81.2％)」で、目的を持って進学する傾向が高いといえる。学科分野別の全体の平均と比較しても、3学科ともにこの項目の選択比率が高い(英語17.0％高　食物調理9.0％高　食物製菓20.9％高　保育14.9％高)ことが分かった。また、「「自宅(親元)から通える(46.1％)」と「経済的理由(14.1％)」も全体よりも高かった。逆に「就職に有利(29.2％)」「学校の場所や設備が良い(14.9％)」は、全体よりも5ポイント程度低かった。

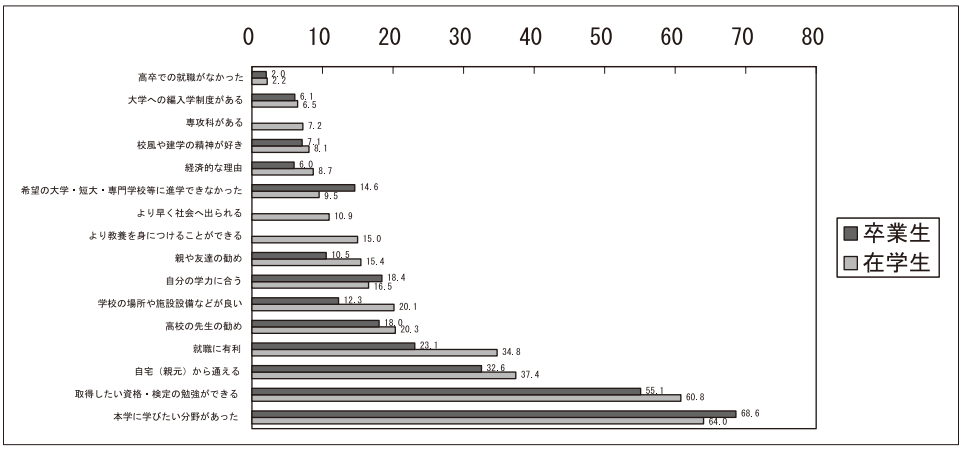
これらのことを総合すると、本学へ進学する理由に経済的要因が強く影響していることと、経済が厳しい中での学ぶ目的を持った進学行動であり、モラトリアム型の進学者は少ないこと、また、就職については、地方であるがゆえに有利な環境ではないことを、学生たちは理解していることが明らかになった。

こうした学生の進学理由の特徴を見ると、本学は、地域の若者が容易にアクセスできる高等教育を提供するという目的を持つ「日本版コミュニティカレッジ」なのだということがよく理解できるのである。

表４－１

		全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
	N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ａ８－ｂ：将来の職業に役立つ勉強	平均値	4.3	4.4	4.2	4.2	4.2	4.3	4.4	4.5	3.8
	%	84.8%	90.9%	80.2%	84.6%	82.2%	92.1%	88.6%	93.5%	61.5%
Ａ８－ｅ：新しい友達との出会い	平均値	4.3	4.3	4.2	4.3	4.2	4.2	4.4	4.4	3.8
	%	81.2%	83.8%	77.9%	87.2%	78.2%	73.7%	85.9%	87.0%	60.0%
Ａ８－ａ：興味ある分野の勉強	平均値	4.2	4.3	4.2	4.2	4.1	4.3	4.3	4.4	3.7
	%	80.8%	90.8%	79.6%	92.3%	78.3%	86.8%	83.6%	92.1%	46.2%
Ａ８－ｆ：自由な雰囲気	平均値	4.1	4.1	4.1	4.3	4.1	3.9	4.1	4.2	3.8
	%	75.3%	77.9%	76.2%	84.6%	73.0%	65.8%	76.4%	80.5%	61.5%
Ａ８－ｃ：人としての教養を深めること	平均値	3.8	4.0	3.9	3.8	3.7	3.7	3.9	4.2	3.8
	%	63.6%	73.4%	69.6%	66.7%	58.3%	60.5%	67.1%	83.1%	65.0%
Ａ８－ｊ：趣味等の活動	平均値	3.7	3.7	4.0	3.9	3.7	3.7	3.7	3.6	3.9
	%	59.3%	57.8%	69.0%	61.5%	57.2%	63.2%	57.4%	53.2%	68.4%
Ａ８－ｉ：アルバイト	平均値	3.6	3.5	3.6	3.5	3.5	3.4	3.6	3.6	3.3
	%	58.4%	53.2%	57.9%	46.2%	56.3%	50.0%	59.9%	58.4%	47.5%
Ａ８－ｄ：良い先生との出会い	平均値	3.5	3.9	3.6	3.9	3.4	3.7	3.6	4.0	3.8
	%	48.9%	68.0%	53.1%	69.2%	45.5%	60.5%	53.5%	71.1%	57.5%
Ａ８－ｈ：サークル・クラブ・部活動等での活躍	平均値	3.0	3.1	3.2	3.1	2.9	2.8	3.1	3.3	3.2
	%	36.3%	40.5%	40.7%	41.0%	33.6%	26.3%	38.5%	47.4%	30.0%
Ａ８－ｇ：ボランティア活動	平均値	2.7	2.9	2.7	2.7	2.5	2.4	3.0	3.3	3.1
	%	20.3%	29.9%	21.1%	15.4%	15.3%	15.8%	26.9%	44.2%	27.5%

表４－２　短大進学理由（卒業生との比較）



注１:「短大学生調査」との比較で使用した卒業生のデータは、本研究グループが、全国 14 短大の卒業後２年目（Ｈ１５年度卒）４年目（Ｈ 13 年度卒）８年目 (平成９年度卒) の卒業生 2,835 人を対象に、平成 17 年６～９月に実施した調査結果から抽出している。

５．短大入学後の半年間の学習活動などについて

５－１．授業期間中の活動

前期の授業期間中にどのような活動に力を注いだかについての結果を表５－１に示した。（表中の「短大全体」は本調査の全体、「本学」は本学日本人の全体、「人文」は本調査の人文分野全体、「英語科」は本学英語科（日本人のみ）全体、「家政」は本調査の家政分野全体、「食物科」は本学食物科（日本人のみ）全体、「教育」は本調査の教育分野全体、「保育学科」は本学保育学科全体である。以下同じ）

本学学生は、「ｇ：友人との交際（75.3%）」「ａ：授業に関する勉強（69.9%）」「ｈ：趣味（59.1%）」に力を入れて活動している。この結果は調査全体と同じであり、その平均値も割合もそれとほぼ近い値を示している。さらに英語科は、このベストスリーの活動（ｇ・ａ・ｈ）の他に、「ｂ：授業とは関係のない勉強（42.1%）」にも力を入れ、「ｄ：サークル・クラブ・部活動（43.6%）」にも参加している割合が高い。食物科は、「ａ：授業に関係する勉強（55.3%）」に力を注いではいるものの、家政分野全体の平均よりも 10 ポイント近く低い値となっている。逆に「ｈ：趣味（63.2%）」は家政分野の平均よりも高く、このことは「ｄ：サークル・クラブ・部活動（50.0%）」に食物科の半数が力を入れていることと関連しているのかもしれない。

一方、保育学科は「ｇ:友人との交際（83.1%）」と「ａ:授業に関する勉強（81.6%）」に８割以上、「ｃ：実習やインターンシップ等、職場での就業体験（64.9%）」「ｆ：アルバイト（61.8%）」でも６割以上が力を注いでいて、授業や実習及び友人関係・アルバイトにも積極的な短大生活を送っていることが読み取れる。さらに、保育学科は「ｅ:ボランティア活動（42.7%）」にも半数近くが参加しているが、英語科(2.6%)と食物科(11.1%)の学生はほとんど参加していない。このことは保育学科の学生たちが、学科ぐるみで地域交流や学友会活動などを企画していることと関係があるだろう。

表５－１　短大入学後半年間の生活

		短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
	N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｃ１－ｇ：友人との交際	平均値	4.15	4.16	4.13	4.15	4.07	3.92	4.27	4.29	3.90
	%	76.8%	75.3%	75.7%	69.2%	74.1%	65.8%	81.2%	83.1%	62.5%
Ｃ１－ａ：授業に関係する勉強	平均値	3.76	3.86	3.85	3.69	3.77	3.55	3.78	4.11	4.00
	%	64.6%	69.9%	68.1%	61.5%	65.2%	55.3%	65.9%	81.6%	70.2%
Ｃ１－ｈ：趣味	平均値	3.67	3.71	3.87	3.90	3.64	3.74	3.61	3.61	3.70
	%	56.8%	59.1%	66.8%	66.7%	55.9%	63.2%	54.3%	53.2%	57.5%
Ｃ１－ｃ：実習やインターンシップ等、職場での就業体験	平均値	2.87	3.38	2.28	2.72	2.67	3.34	3.48	3.73	2.80
	%	34.2%	50.6%	18.4%	25.6%	28.0%	47.4%	53.1%	64.9%	41.1%
Ｃ１－ｆ：アルバイト	平均値	3.12	3.19	3.08	3.00	3.07	2.68	3.13	3.54	3.30
	%	48.2%	49.7%	47.6%	41.0%	47.4%	34.2%	48.6%	61.8%	46.2%
Ｃ１－ｂ：授業とは関係ない勉強	平均値	2.89	3.06	3.12	3.24	2.84	2.76	2.87	3.12	2.90
	%	26.4%	33.3%	36.7%	42.1%	25.7%	26.3%	23.7%	32.5%	22.5%
Ｃ１－ｄ：サークル・クラブ・部活動	平均値	2.20	2.84	2.43	2.77	2.10	3.11	2.32	2.75	3.10
	%	21.4%	43.5%	27.1%	43.6%	20.0%	50.0%	23.7%	40.3%	33.4%
Ｃ１－ｅ：ボランティア活動	平均値	2.09	2.40	2.05	1.85	1.95	1.81	2.36	2.97	2.40
	%	15.3%	24.7%	16.2%	2.6%	13.2%	11.1%	20.2%	42.7%	23.1%

（平均値：５段階評価の平均，％：４と５（力を注いだ）を選んだ割合）

次に短大生１週間の具体的な生活の様子をみるため、授業期間中、さまざまな活動に費やした１週間の合計時間を表５－２と表５－３に示した。表５－２は、授業出席及びそれに関連する勉強が週合計 21 時間以上（参考：１コマ 90 分で週 10 コマの場合 15 時間）と答えた割合である。表５－３は各活動が週合計２時間以上と答えた割合である。

１週間当たり 21 時間以上勉強する学生の割合は、調査全体では教育分野（70.3%）が最も多く、家政分野（50.6%）と人文分野 (49.8%) はほぼ半数である。けれども本学では、家政分野に属する食物科（65.6%）が最も多く、次いで保育学科（58.5%）、英語科（48.6%）となっている。英語科は人文分野とほぼ同じ割合であるが、保育学科は教育分野全体より 10 ポイント以上低くなっている。

表５－２　授業に関係する勉強

	短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｃ２Ａ－ａ：授業に関係する勉強	57.9%	57.6%	49.8%	48.6%	50.6%	65.6%	70.3%	58.5%	61.8%

（週合計２１時間以上と答えた割合）

授業に関係する勉強以外の活動については、本学学生は、週合計２時間以上「ｈ：友人との交際 (90.4%)」「ｍ：テレビを見る（69.6%)」「ｇ：アルバイト（59.7%)」などに費やしている。表にはないが、これらの活動を週 31 時間以上している本学学生は、それぞれ 25.3%、15.5%、16.1%に上っている。つまり４人に１人が毎日５時間近く友人と交際し、６人に１人が毎日５時間近くテレビを見、同じく６人に１人が毎日５時間近くアルバイトをしているということになる。夏休み中になると、アルバイトを週 31 時間以上するという学生はさらに増え、４人に１人とっている。

本学学生があまりしていない活動は、「ｆ：ボランティア活動（15.3%)」「ｉ：インターネットを通しての友人との交流（17.8%)」「ｋ：趣味としての読書（25.7%)」である。つまり、学生たちは「ｈ：友人との交際」には力を注ぐが、それは「ｉ：インターネットを通しての交流」ではないということ

がわかる。

また、夏休み中の授業のないときでも、本学学生は「ｋ：趣味としての読書（28.8%）」をあまりしていないという結果が出ている。

表５－３　授業期間中のさまざまな活動

	短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｃ２Ｂ－ｈ：友人との交際	88.3%	90.4%	88.9%	91.9%	87.2%	89.2%	89.9%	90.3%	92.5%
Ｃ２Ｂ－ｍ：テレビを見る	78.4%	69.6%	75.7%	69.2%	78.4%	70.3%	79.5%	69.4%	50.0%
Ｃ２Ｂ－ｇ：アルバイト	60.1%	59.7%	57.2%	51.3%	58.6%	51.4%	60.4%	68.5%	50.0%
Ｃ２Ｂ－ｎ：家事手伝い	58.1%	53.1%	59.7%	57.9%	60.7%	45.7%	59.6%	54.2%	84.6%
Ｃ２Ｂ－ｊ：趣味としての運動やスポーツ	30.1%	39.5%	31.1%	28.2%	28.7%	38.9%	33.5%	45.8%	65.0%
Ｃ２Ｂ－ｅ：サークル・クラブ・部活動	23.6%	37.7%	28.8%	44.7%	21.4%	43.2%	25.9%	31.0%	27.0%
Ｃ２Ｂ－ｃ：実習やｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ等、職場での就業体験	26.0%	34.0%	14.8%	17.9%	22.2%	45.7%	39.1%	37.1%	32.5%
Ｃ２Ｂ－ｂ：授業以外の勉強や宿題	42.0%	33.8%	51.2%	36.1%	44.2%	48.6%	42.1%	25.0%	74.4%
Ｃ２Ｂ－ｄ：授業以外での教員との会話	18.1%	28.4%	19.5%	25.6%	15.1%	32.4%	22.1%	27.8%	37.5%
Ｃ２Ｂ－Ｉ：テレビやパソコンでのゲーム遊び	39.3%	28.4%	43.7%	35.9%	39.6%	24.3%	32.8%	26.4%	67.5%
Ｃ２Ｂ－ｋ：趣味としての読書	27.7%	25.7%	37.9%	30.8%	29.2%	30.6%	22.7%	20.5%	71.8%
Ｃ２Ｂ－ｉ：インターネットを通しての友人との交流	24.3%	17.8%	28.9%	20.5%	22.5%	13.9%	24.4%	18.3%	75.0%
Ｃ２Ｂ－ｆ：ボランティア活動	16.5%	15.3%	16.8%	0.0%	13.9%	5.9%	21.8%	28.2%	30.0%

（週合計２時間以上を選んだ割合）

５－２．短大入学後、半年間の授業への取り組み等について

短大入学後半年間に力を入れた学習への取り組みをみるため、各取り組みを５段階で評価した平均値及び「４と５（ほぼ日常的にした）を選択した合計の割合」を表５－４に示した。

本学学生がほぼ日常的にした活動は、「ａ：授業に出席する」が92.1%と突出して高い。次に「ｊ：授業の課題をきちんと提出する（71.3%）」「ｅ：授業での配付資料・プリントを整理する（61.2%）」と続き、学生たちの授業に対する真面目な取り組みをうかがうことができる。食物科では「ｅ」の割合が他と比べて低いが、これは食物科が実習等が多く、座学での配付資料等が他学科と比べて少ないからであると考えられる。

また本学全体の特徴として、「ｃ：授業中以外に教員とコミュニケーションをとる（40.1%）」ことをほぼ日常的にする学生が約４割いて調査全体の２倍近い。

英語科の学生は「ｇ:辞書･電子辞書を活用する（86.8%）」「ｉ:インターネットを活用する（63.2%）」ことを日常的に行っているが、食物科ではほとんどおこなっていない（それぞれ5.4%と5.3%）。さらに本学学生は、全体的に「ｈ：図書館を利用する（13.9%）」機会が少なく、特に保育学科（6.7%）の学生の利用率が低い。

試験前の勉強に関しては、本学全体で８割近くがほぼ一生懸命やっており、調査全体平均とほとんど差がみられなかった。

表５－４　学習への取り組み

		短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
N		7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｃ４Ａ－ａ：授業に出席する	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	89.6%	92.1%	87.9%	84.2%	89.8%	89.5%	91.8%	97.4%	74.4%
Ｃ４Ａ－ｊ：授業の課題をきちんと提出する	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	76.6%	71.3%	75.2%	68.4%	76.8%	56.8%	78.8%	80.0%	47.5%
Ｃ４Ａ－ｅ：授業での配布資料・プリントを整理する	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	65.5%	61.2%	65.3%	65.8%	64.3%	34.2%	67.3%	72.4%	72.5%
Ｃ４Ａ－ｄ：ノートの取り方を工夫する	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	45.8%	46.7%	46.8%	47.4%	45.3%	36.8%	49.1%	51.3%	52.5%
Ｃ４Ａ－ｃ：授業中以外に教員とコミュニケーションをとる	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	24.7%	40.1%	31.1%	44.7%	20.4%	28.9%	28.8%	43.4%	37.5%
Ｃ４Ａ－ｇ：辞書・電子辞書を活用する	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	32.0%	33.1%	69.1%	86.8%	25.5%	5.4%	27.0%	19.7%	74.4%
Ｃ４Ａ－ｂ：授業中、教員の質問に答えたり、意見を述べたりする	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	24.3%	30.5%	38.4%	34.2%	21.0%	23.7%	25.5%	32.0%	70.0%
Ｃ４Ａ－ｉ：インターネットを活用する	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	48.3%	27.2%	64.6%	63.2%	47.5%	5.3%	39.8%	20.0%	45.0%
Ｃ４Ａ－ｋ：授業の予習・復習をする	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	16.6%	15.2%	31.6%	28.9%	13.1%	10.5%	14.6%	10.7%	40.0%
Ｃ４Ａ－ｈ：　図書館を利用する	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	30.7%	13.9%	50.0%	23.7%	30.5%	18.4%	27.3%	6.7%	43.6%
Ｃ４Ａ－ｆ：教科書以外に参考文献などを読む	平均値	4.6	4.6	4.5	4.4	4.6	4.3	4.6	4.8	4.3
	%	14.4%	13.2%	22.8%	15.8%	14.7%	7.9%	13.3%	14.7%	37.5%

（平均値：５段階評価の平均、％：４と５（ほぼ日常的にした）を選んだ割合

授業期間中の学習態度をみるため、それらの態度を５段階で評価した平均値及び「４と５（ほとんどしなかった）を選択した合計の割合」を表５－５に示した。

全体的に本学の学生は、「ｄ：アルバイトで授業を休む（93.3%）」「ｅ：サークルや趣味活動で授業を休む（93.3%）」「ａ：授業に遅刻する（83.6%）」ということがほとんどなく、極めて真面目な学習態度で授業に臨んでいることがわかった。

特に食物科は、「ｃ：授業中に携帯電話やメールを使用する（76.3%）」「ｂ：授業中に私語をする（71.1%）」といったことも７割以上がほとんどせず、調査全体の平均（50.0%）と比較しても非常にまじめな授業態度を示している。逆に、英語科と保育学科では「授業中に私語をする」を、ほとんどしないと答えた学生は４割強にとどまっている。

このような本学の学生たちが１年生前期の自分の成績をどのように評価したのかという設問（「成績はどの程度だと思いますか」）に対しては、約２割が上位（５段階評価で４と５）だと思うと回答していた。また、その成績についてどう思うかという設問（「あなたはその成績についてどう思いますか」）に対しても、約２割が満足である（５段階評価で４と５）と回答しており、これらは調査全体とほぼ同じ結果であった。

表５－５　授業期間中の学習態度

		短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
	N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｃ５－ｄ：アルバイトで授業を休む	平均値	4.8	4.8	4.7	4.7	4.8	4.7	4.8	4.8	4.5
	%	93.7%	93.3%	92.3%	92.1%	94.6%	91.9%	93.9%	94.6%	84.6%
Ｃ５－ｅ：サークルや趣味活動で授業を休む	平均値	4.7	4.7	4.7	4.7	4.8	4.8	4.7	4.7	4.4
	%	92.5%	93.3%	90.9%	92.1%	92.8%	94.6%	92.5%	93.2%	76.9%
Ｃ５－ａ：授業に遅刻する	平均値	4.2	4.3	4.1	4.1	4.2	4.3	4.3	4.5	4.1
	%	79.3%	83.6%	75.0%	78.9%	80.4%	78.9%	82.0%	88.2%	79.5%
Ｃ５－ｃ：授業中に携帯電話やメールを使用す	平均値	3.5	3.9	3.8	4.2	3.6	4.2	3.4	3.7	4.5
	%	50.0%	67.8%	62.4%	76.3%	53.1%	76.3%	45.0%	59.2%	82.1%
Ｃ５－ｂ：授業中に私語をする	平均値	3.3	3.5	3.4	3.4	3.3	3.9	3.1	3.4	3.7
	%	39.7%	52.0%	46.6%	42.1%	44.1%	71.1%	32.8%	47.4%	66.7%

（平均値：５段階評価の平均、％：４と５（ほとんどしなかった）を選んだ割合）

５－３．短大の学習環境への評価

５－３－１．教育課程に対する評価

教育課程への満足度をみるため、教育課程の内容を表した各項目を５段階で評価した平均値及び「４と５（ほぼ満足した）を選択した合計の割合」を表５－６に示した。

まず特筆すべきは、本学学生の本学に対する教育課程の満足度は、すべての項目について調査全体の平均を大きく上回っていたことである。

学科別にみると、英語科では、「ｂ：豊かな教養を身につける授業（73.7%）」「ｆ：わかりやすい授業（71.1%）」「ｅ：学外体験（実習やインターンシップ）の機会（71.1%）」「ａ：選択できる授業の多様性（68.4%）」に関して、７割もの学生が満足している。食物科では、「ｃ：専門的知識や技術を身につける授業（81.1%）」「ｄ：実践（職業）で役立つ実学性重視の授業（75.7%）」に対して、それぞれ８割以上、７割以上の学生が満足という極めて高い満足度を示している。保育学科も食物科同様、「ｃ：専門的知識や技術を身につける授業（70.7%）」「ｄ：実践（職業）で役立つ実学性重視の授業（70.7%）」に７割以上が満足している。

「ｇ：授業方法に工夫がある授業」に対して、英語科（57.9%）と保育学科（54.7%）では、５割以上が満足しているが、食物科（32.4%）では３割に満たない学生しか満足していない。その一方で「ｉ：私語のない授業」に対しては、食物科（48.6%）が５割近く満足し、英語科（23.7%）と保育学科（25.3%）では、その半分の学生しか満足していないという結果となっている。

表５－６　教育課程に対する評価

教育課程		短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
	N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｃ７Ａ－ｃ：専門的知識や技術を身につける授業	平均値	3.8	4.0	3.6	3.8	3.8	4.3	3.9	3.9	3.3
	%	63.3%	72.0%	52.7%	65.8%	64.7%	81.1%	67.9%	70.7%	35.0%
Ｃ７Ａ－ｄ：実践（職業）で役立つ実学性重視の授業	平均値	3.7	3.9	3.4	3.8	3.6	4.1	3.9	4.0	3.2
	%	55.7%	69.3%	42.5%	60.5%	53.5%	75.7%	65.4%	70.7%	25.6%
Ｃ７Ａ－ｂ：豊かな教養を身につける授業	平均値	3.5	3.7	3.5	3.9	3.4	3.6	3.5	3.6	3.6
	%	45.8%	60.7%	49.6%	73.7%	42.9%	54.1%	48.9%	57.3%	50.0%
Ｃ７Ａ－ｆ：わかりやすい授業	平均値	3.3	3.7	3.4	3.9	3.2	3.4	3.4	3.6	3.6
	%	36.8%	56.0%	43.3%	71.1%	33.8%	43.2%	41.4%	54.7%	50.0%
Ｃ７Ａ－ａ：選択できる授業の多様性	平均値	3.4	3.7	3.5	4.0	3.4	3.5	3.3	3.6	3.5
	%	44.3%	55.3%	53.5%	68.4%	43.5%	51.4%	38.9%	50.7%	52.5%
Ｃ７Ａ－ｅ：学外体験（実習やインターンシップ）の機会	平均値	3.3	3.6	3.1	4.1	3.1	3.2	3.7	3.6	2.8
	%	39.2%	50.0%	30.4%	71.1%	33.1%	35.1%	54.1%	46.7%	17.5%
Ｃ７Ａ－ｇ：授業方法に工夫がある授業	平均値	3.3	3.6	3.4	3.7	3.2	3.2	3.3	3.6	3.7
	%	35.7%	50.0%	42.1%	57.9%	32.7%	32.4%	39.5%	54.7%	55.0%
Ｃ７Ａ－ｈ：参加意識が持てる授業	平均値	3.3	3.5	3.4	3.7	3.2	3.2	3.3	3.6	3.7
	%	36.5%	46.7%	43.5%	52.6%	34.7%	35.1%	38.3%	49.3%	52.5%
Ｃ７Ａ－ｉ：私語のない授業	平均値	2.9	3.2	3.0	3.0	2.9	3.6	2.8	3.1	3.5
	%	20.8%	30.7%	27.6%	23.7%	22.2%	48.6%	19.1%	25.3%	45.0%

（平均値：５段階評価の平均、％：４と５（ほぼ満足）を選んだ割合）

５－３－２．学生支援に対する評価

学生支援への満足度をみるため、学生支援の内容を表した各項目を５段階で評価した平均値及び「４と５（ほぼ満足した）を選択した合計の割合」を表５－７に示した。

本学学生は、「ｓ：図書館や情報設備（45.0%）」を除くすべての項目で、調査全体の平均値を上回る満足度を示した。特に「ｏ：授業以外で教員と交流する機会（56.7%）」「ｎ：精神的なケアや励まし（52.0%）」では、調査全体平均の２倍以上の割合の学生が満足しており、いわゆる「面倒見の良い教員が多い」という評判を裏付けている。

学科別にみると、英語科ではすべての項目で人文分野の平均を上回っており、「ｑ：進路や悩みなどを気軽に相談できる体制（57.9%）」以外のすべてに対して６割以上が満足している。人文分野の平均と比較して、特に「ｏ：授業以外で教員と交流する機会（68.4%）」「ｒ：部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会（60.5%）」「ｎ:精神的なケアや励まし（55.3%）」に対する満足度が高い。

食物科では、「ｊ：科目履修に関する助言や指導（70.3%）」に満足している学生が非常に多い。そして家政分野の平均と比較して、「ｏ：授業以外で教員と交流する機会（59.5%）」「ｑ：進路や悩みなどを気軽に相談できる体制（59.5%）」「ｎ：精神的なケアや励まし（54.1%）」「ｒ：部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会（54.1%）」にも高い満足度を示している。

保育学科では「ｊ：科目履修に関する助言や指導（50.2%）」に対する満足度も高いが、教育分野の平均と比較すると「ｏ：授業以外で教員と交流する機会（49.3%）」「ｑ：進路や悩みなどを気軽に相談できる体制（52.6%）」「ｒ：部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会（50.0%）」「ｎ：精神的なケアや励まし（49.3%）」に対しても満足度が高いことがわかる。

「ｍ：教員の専門分野に触れる機会」に対しては、英語科（60.5%）と食物科（59.5%）は６割が満足しているが、保育学科（40.0%）では４割にとどまっている。

表５－７　学生支援に対する評価

学生支援		短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
	N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｃ７Ｂ－ｊ：科目履修に関する助言や指導	平均値	3.4	3.7	3.5	3.8	3.4	4.0	3.4	3.6	3.8
	%	43.5%	59.3%	47.7%	63.2%	43.6%	70.3%	43.1%	52.0%	52.5%
Ｃ７Ｂ－ｏ：授業以外で教員と交流する機会	平均値	3.0	3.7	3.1	3.9	3.0	3.8	3.1	3.6	3.3
	%	26.2%	56.7%	30.7%	68.4%	23.2%	59.5%	29.2%	49.3%	32.5%
Ｃ７Ｃ－ｐ：就職・進路支援の体制	平均値	3.5	3.7	3.6	3.7	3.4	3.8	3.5	3.6	3.2
	%	46.3%	56.3%	55.9%	63.2%	44.7%	62.2%	46.6%	50.0%	35.0%
Ｃ７Ｃ－ｑ：進路や悩みなどを気軽に相談できる体制	平均値	3.2	3.6	3.3	3.6	3.1	3.6	3.3	3.7	3.3
	%	34.3%	55.6%	40.6%	57.9%	32.1%	59.5%	36.9%	52.6%	37.5%
Ｃ７Ｃ－ｒ：部活・ｻｰｸﾙ・ｲﾍﾞﾝﾄなど学生同士の交流の機会	平均値	3.0	3.7	3.1	3.7	3.0	3.7	3.2	3.6	3.0
	%	28.3%	53.6%	33.1%	60.5%	25.7%	54.1%	33.2%	50.0%	30.8%
Ｃ７Ｂ－ｎ：精神的なケアや励まし	平均値	3.0	3.7	3.1	3.7	2.9	3.8	3.1	3.6	3.6
	%	25.6%	52.0%	28.9%	55.3%	23.1%	54.1%	28.5%	49.3%	42.5%
Ｃ７Ｂ－ｌ：学習スキルを向上するための手助け	平均値	3.3	3.6	3.4	3.8	3.2	3.6	3.3	3.6	3.6
	%	36.5%	51.3%	41.9%	60.5%	34.5%	54.1%	36.7%	45.3%	40.0%
Ｃ７Ｂ－ｍ：教員の専門分野に触れる機会	平均値	3.3	3.6	3.3	3.7	3.3	3.8	3.4	3.5	3.3
	%	38.0%	50.0%	37.9%	60.5%	37.6%	59.5%	40.9%	40.0%	33.3%
Ｃ７Ｂ－ｋ：就職や編入学など進路選択の励まし	平均値	3.2	3.6	3.3	3.7	3.2	3.5	3.2	3.5	3.5
	%	33.6%	46.3%	41.6%	60.5%	32.6%	44.4%	33.6%	40.0%	52.5%
Ｃ７Ｃ－ｓ：図書館や情報設備	平均値	3.6	3.4	3.8	3.6	3.6	3.4	3.6	3.3	3.4
	%	50.4%	45.0%	62.9%	63.2%	50.0%	35.1%	51.6%	40.8%	35.9%

（平均値：５段階評価の平均、％：４と５（ほぼ満足）を選んだ割合）

５－４．入学後半年間の振り返り

５－４－１．知識・技能・態度の変化

入学後半年間の知識・技能・態度の変化をみるため、それらの内容を表した各項目を５段階で自己評価した平均値及び「４と５（高まった）を選択した合計の割合」を表５－８に示した。

本学学生は、すべての項目に対して調査全体の平均よりも「高まった」と感じている割合が高く、特に「ｈ：一般的な常識や礼儀・マナー（89.4%）」が高まったと感じている割合が高かった。このことは、茶道文化の授業をわずか半年間受講しただけであるにもかかわらず、学生たち自身にその自覚が現れた結果ともみられ、本学の教育理念が具現化されている証とも言えるだろう。

項目別に大まかな特徴をみると、「ｄ：職業や進路選択への方向付け（英語科（69.2%）、食物科（65.8%）、保育学科（74.3%））」に対しては、３学科とも７割が高まったと感じており、本学学生は短大入学後半年で将来への希望する進路が見えて来たと言えるかも知れない。

「ｂ：専門的な知識や技能（69.2%、86.8%、84.0%）」「ｃ：幅広い知識や教養（66.7%、76.3%、78.7%）」「ｊ：チームで仕事をする力（59.0%、78.4%、77.0%）」「ｆ：多様なものの見方を受け入れること（59.0%、73.7%、68.9%）」に対しては、食物科と保育学科で高まったと感じている学生が多い。

「ｉ：人とのコミュニケーション能力（74.4%、47.4%、82.4%）」に対しては、英語科と保育学科で高まったと感じた学生が８割いるのに対し、食物科では半分以下である。

「ａ：学問に対する興味関心（61.5%、55.3%、74.7%）」「ｇ：社会の現実的な問題への関心（64.1%、57.9%、75.7%）」「ｍ：最後までやり抜く力（61.5%、50.0%、78.4%）」「ｎ：自分に対する自信（35.9%、26.3%、51.4%）」に対しては、保育学科で高まったと感じた学生が多い。

「ｌ：自分で考え行動する力（71.8%、52.6%、62.2%）」に対しては、英語科で高まったと感じた学生が多いが、逆に「ｅ：ひとつの問題を深く探究する態度（28.2%、39.5%、45.9%）」に対しては、英語科が人文分野全体と比較して10ポイント低い結果となっている。

「ｋ：リーダーシップ（35.9%、21.1%、30.1%）」に対しては、調査全体でも３割程度の学生だけが高まったと感じているに過ぎず、短期大学学生支援全体の課題であるとも考えられる。

表５－８　知識・技能・態度の変化

		短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
	N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｃ８－ｈ：一般的な常識や礼儀・マナー	平均値	3.9	4.2	4.1	4.4	3.8	4.1	3.9	4.2	4.0
	%	70.5%	89.4%	78.5%	94.9%	67.5%	86.8%	71.7%	87.8%	70.0%
Ｃ８－ｂ：専門的な知識や技能	平均値	3.9	4.0	3.7	3.7	3.9	4.2	4.0	4.1	3.6
	%	75.4%	80.9%	65.2%	69.2%	74.1%	86.8%	81.1%	84.0%	50.0%
Ｃ８－ｃ：幅広い知識や教養	平均値	3.8	3.9	3.7	3.8	3.7	3.9	3.9	4.0	3.6
	%	67.3%	75.0%	62.6%	66.7%	64.3%	76.3%	73.7%	78.7%	52.5%
Ｃ８－ｊ：チームで仕事をする力	平均値	3.7	3.9	3.6	3.7	3.6	4.0	3.9	3.9	3.5
	%	56.6%	72.7%	53.5%	59.0%	54.1%	78.4%	66.4%	77.0%	52.5%
Ｃ８－ｉ：人とのコミュニケーション能力	平均値	3.8	3.9	3.9	4.0	3.7	3.5	3.9	4.1	3.8
	%	67.3%	71.5%	70.2%	74.4%	62.1%	47.4%	72.4%	82.4%	62.5%
Ｃ８－ｄ：職業や進路選択への方向づけ	平均値	3.7	3.8	3.8	3.8	3.6	3.8	3.8	3.9	3.5
	%	62.5%	70.9%	64.7%	69.2%	57.4%	65.8%	67.6%	74.3%	45.0%
Ｃ８－ａ：学問に対する興味関心	平均値	3.7	3.8	3.6	3.6	3.7	3.7	3.8	3.9	3.8
	%	61.4%	66.4%	60.5%	61.5%	61.2%	55.3%	67.5%	74.7%	47.5%
Ｃ８－ｇ：社会の現実的な問題への関心	平均値	3.7	3.9	3.8	3.8	3.7	3.6	3.8	4.0	3.7
	%	60.0%	68.2%	64.5%	64.1%	56.4%	57.9%	64.4%	75.7%	50.0%
Ｃ８－ｆ：多様なものの見方を知って受け入れること	平均値	3.7	3.8	3.7	3.8	3.6	3.8	3.7	3.9	3.9
	%	56.4%	67.5%	59.7%	59.0%	51.8%	73.7%	61.8%	68.9%	62.5%
Ｃ８－ｍ：最後までやり抜く力	平均値	3.7	3.9	3.7	3.8	3.7	3.7	3.9	4.0	3.7
	%	59.3%	66.9%	57.9%	61.5%	54.8%	50.0%	67.7%	78.4%	52.5%
Ｃ８－ｌ：自分で考え、行動する力	平均値	3.7	3.8	3.8	3.9	3.6	3.6	3.8	3.8	3.8
	%	58.9%	62.3%	63.4%	71.8%	55.5%	52.6%	62.8%	62.2%	52.5%
Ｃ８－ｎ：自分に対する自信	平均値	3.2	3.4	3.3	3.3	3.1	3.1	3.3	3.5	3.9
	%	31.1%	41.1%	36.7%	35.9%	27.4%	26.3%	35.2%	51.4%	62.5%
Ｃ８－ｅ：ひとつの問題を深く探究する態度	平均値	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.4	3.5	3.5	3.5
	%	38.9%	39.7%	39.8%	28.2%	36.4%	39.5%	43.5%	45.9%	37.5%
Ｃ８－ｋ：リーダーシップ	平均値	3.2	3.2	3.2	3.3	3.1	3.1	3.3	3.3	3.4
	%	27.7%	29.3%	29.0%	35.9%	23.1%	21.1%	34.9%	30.1%	47.5%

（平均値：５段階評価の平均、％：４と５（高まった）を選んだ割合）

５－４－２．半年後の短大生活に対する満足度

短大入学後の半年間の生活に対する満足度をみるため、それらの内容を表した各項目を５段階で評価した満足度の平均値、および同項目を短大入学前にはどのくらい期待していたかを５段階で評価した期待度として、その平均値と満足度の平均値との差を表５－８に示した。（「ｋ：一人暮らし」については、期待度と満足度に対する回答数が異なるので除外した。）

調査全体で最も高かった満足度は「ｅ：新しい友だちとの出会い（4.21）」であり、本学学生（4.34）の満足度もそれを上回るほどに高かった。けれども、本学学生でより特徴的なことは、「ｄ：良い先生との出会い」が本学全体（4.22）としても、学科別にみても（英語科（4.23）、食物科（4.11）、保育学科(4.11)）、入学前の期待度を上回っていたことである。特に英語科と食物科でその差が大きかった。このことは「５－３－２．学生支援に対する評価」で、「ｏ：授業以外で教員と交流する機会」や「ｎ：精神的なケアや励まし」に対する満足度が、調査全体平均の２倍以上であったこととも深く関係しているだろう。また英語科の学生は「ｃ：人としての教養を深めること（3.97）」でも、期待度よりもわずかに高い満足度を示していた。

そして本学学生は、「ｂ：将来の職業に役立つ勉強（4.02）」「ａ：興味ある分野の勉強（4.00）」に

対する満足度も高いが、それらに対する入学前の期待度はさらに高く、教員は満足度の高さに慢心することなく、そのギャップを埋めるための努力を怠ってはならない。

また、英語科と保育学科では「ｆ：自由な雰囲気（4.21、4.18）」に対する満足度が高いが、食物科では3.79にとどまっている。

表５－９　入学半年後の短大生活に対する満足度

		短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
	N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｃ９－ｅ：新しい友だちとの出会い	平均値	4.21	4.34	4.21	4.28	4.15	4.34	4.33	4.36	3.92
	期待度との差	-.06	.01	.03	-.03	-.05	.13	-.07	-.04	.12
Ｃ９－ｄ：良い先生との出会い	平均値	3.48	4.14	3.60	4.23	3.41	4.11	3.56	4.11	3.73
	期待度との差	-.02	.22	.04	.31	.01	.37	-.06	.09	-.08
Ｃ９－ｆ：自由な雰囲気	平均値	3.71	4.09	3.95	4.21	3.72	3.79	3.71	4.18	3.85
	期待度との差	-.40	-.06	-.19	-.10	-.34	-.08	-.44	-.03	.03
Ｃ９－ｂ：将来の職業に役立つ勉強	平均値	3.81	4.02	3.64	3.95	3.70	3.95	4.02	4.09	3.60
	期待度との差	-.50	-.34	-.54	-.26	-.51	-.37	-.42	-.37	-.25
Ｃ９－ａ：興味ある分野の勉強	平均値	3.75	4.00	3.68	4.03	3.72	4.08	3.88	3.94	3.54
	期待度との差	-.44	-.35	-.48	-.18	-.40	-.26	-.40	-.48	-.13
Ｃ９－ｃ：人としての教養を深めること	平均値	3.66	3.92	3.70	3.97	3.57	3.68	3.78	4.01	3.63
	期待度との差	-.18	-.05	-.24	.13	-.14	-.03	-.13	-.16	-.18
Ｃ９－ｊ：趣味等の活動	平均値	3.43	3.67	3.63	4.00	3.38	3.47	3.39	3.59	3.55
	期待度との差	-.30	-.06	-.34	.10	-.28	-.26	-.31	-.04	-.37
Ｃ９－ｉ：アルバイト	平均値	3.20	3.29	3.25	3.37	3.18	3.03	3.20	3.38	3.30
	期待度との差	-.41	-.25	-.36	-.09	-.36	-.42	-.44	-.25	-.02
Ｃ９－ｈ：サークル・クラブ・部活動等での活躍	平均値	2.74	3.25	2.89	3.18	2.66	3.32	2.82	3.25	3.08
	期待度との差	-.28	.13	-.26	.08	-.25	.56	-.29	-.06	-.15
Ｃ９－ｇ：ボランティア活動	平均値	2.80	3.12	2.86	2.92	2.70	2.71	2.94	3.42	3.18
	期待度との差	.11	.18	.20	.21	.22	.35	-.02	.09	.05

（平均値：満足度５段階評価の平均、期待度との差：入学前の期待度と満足度平均値の差）

６．家族や現在の生活実態について

６－１．居住形態

本学は、本学の学生たちが全体（74.7%）で７割以上、保育学科（90.9%）に至っては９割以上が長崎県内出身者で、家族もほぼ同じ割合（全体76.0%）で県内に居住している地域密着型の短期大学である。

自宅（60.8%）と自宅外通学者（39.2%）の割合は本学全体で６：４である。（調査全体では72.6%と27.4%で７：３）。学科別では、保育学科の自宅通学者（77.6%）が８割弱と多く、英語科と食物科では若干自宅外通学者の方が多い（53.8%と57.9%）。自宅外通学者全60人のうち、40人が短大近くのアパートに住んでおり、15人が短大の寮に入っている。

６－２．アルバイトの経験と学費・生活費の負担者

アルバイトの経験があるのは本学全体（71.3%）で７割（調査全体でも７割（72.3%））、英語科（62.2%）と食物科（64.9%）が６割強、保育学科（78.9%）が８割弱である。その中で、短大での学習内容と関連のあるアルバイトをしていると答えたのは、英語科（43.5%）と食物科（41.7%）では４割ずつであるが、保育学科（22.0%）では２割しかいなかった。どのような職種がそれぞれの学科の学習内容と関連があるのか今回の調査でははっきりと述べることはできないが、この数値から、本学の学生がアルバイトを選ぶ時には、自分が短大で学んでいる内容との関連をあまり考えてはいない傾向があると言える。

調査全体で、アルバイトで得た収入の使いみち（複数回答可）で最も多かったのは「６:服飾費（洋服代など）(78.4%)」であるが、本学学生では、英語科と保育学科で「６：(66.7%、72.9%)」が最も多く、食物科はわずか４割（40.0%）であった。食物科では「７：預貯金（52.0%)」が最も多かったが、英語科（58.3%）でも保育学科（54.2%）でも半数以上が預貯金をしている。この「７」の割合は調査全体（56.8%）とほぼ同じである。

また「１：授業料・実習費などの学納金」は、調査全体では 15.8%であるが、本学の学生たち（英語科（25.0%)、食物科（20.0%)、保育学科（20.3%)）は若干高い割合を示した。「２：生活費」は、本学全体（35.2%）では調査全体（37.3%）とあまり変わらないが、学科別にみると保育学科が 40.0%と高い割合を示している。ただし、この回答は複数回答可で、しかも使った金額の絶対値を尋ねているわけではないので、これだけで本学保育学科の学生が生活のためにアルバイトをしているとは言い難い。

調査全体の学費・生活費の負担者は「ａ：家族・親戚等（84.0%)」が８割を超えているが、本学（79.1%）では８割に届いていない。そして、「ｃ：奨学金」からの負担が調査全体で 24.1%であるのに対し、本学では 43.9%と極めて高い値を示している。

６－３．学生の短大進学に対する家族の理解

本学に進学したことに対して、学生と家族がどのような関係にあるのかをみるために、学生が感じた家族の思いについて、５段階で評価した平均値及び「４と５（そう思う）を選択した合計の割合」を表６－１に示した。

本学全体では、「ｄ：家族は、私が卒業後良い就職をすることを望んでいる（83.0%)」と感じている学生が大部分である。特に英語科（89.7%）ではその割合が高い。またその思いを受けて、「ｂ：家族は、私の短大生活を応援している（’77.1%)」と感じている学生も多い。おそらくその理由は「ｃ：家族は、私の短大進学を喜んでいる（65.4%)」からであり、「ａ：家族と、私の短大での生活についてよく話す（65.4%)」からであろう。

その一方、「ｅ：家族は、私が卒業後良い進学をすることを望んでいる（27.8%)」と感じている学生は少なく、特に食物科が少ない。学生にとって、短大が学校教育の最終ステージとなる可能性は高く、そのためのキャリア教育・職業教育は非常に重要である。

表６－１　短大進学に対する家族の思い

		短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
	N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｄ５－ｄ：家族は、私が卒業後良い就職をすることを望んでいる	平均値	4.2	4.3	4.1	4.5	4.2	4.3	4.3	4.3	3.8
	%	77.8%	83.0%	74.7%	89.7%	75.9%	76.3%	80.2%	82.9%	63.2%
Ｄ５－ｂ：家族は、私の短大生活を応援している	平均値	4.0	4.1	4.0	4.1	3.9	4.2	4.2	4.1	3.7
	%	68.5%	77.1%	67.1%	79.5%	66.7%	84.2%	75.4%	72.4%	55.3%
Ｄ５－ｃ：家族は、私の短大進学を喜んでいる	平均値	3.7	3.9	3.7	3.8	3.7	3.8	4.0	4.0	3.9
	%	57.6%	65.4%	56.2%	64.1%	55.3%	60.5%	66.2%	68.4%	57.9%
Ｄ５－ａ：家族と、私の短大での生活についてよく話す	平均値	3.6	3.8	3.6	3.9	3.5	3.7	3.8	3.8	3.8
	%	55.0%	65.4%	56.2%	71.8%	51.5%	60.5%	61.9%	64.5%	61.5%
Ｄ５－ｅ：家族は、私が卒業後良い進学をすることを望んでいる	平均値	2.6	2.5	2.7	2.4	2.5	1.6	2.7	3.0	3.9
	%	28.5%	27.8%	32.4%	28.9%	25.4%	5.3%	31.8%	38.7%	63.2%

（平均値：５段階評価の平均、％：４と５（そう思う）を選んだ割合）

７．将来の生活に対する考え

７－１　卒業後の進路

全体では85.5％が、卒業後には正規職として就職することを望んでいる。専攻科、四年制大学、専門学校への進学希望者は9.6％で、人文教養（21.1％）が特に高いが、社会9.2％、家政9.1％、教育6.7％、地域総合科学5.2％と専攻分野による差が大きい。

本学の日本人学生は９割以上（90.2％）が正規職を希望し進学希望は７人しかいない。また、将来の仕事に必要という理由等で留学生の７割が四年制大学への進学を希望していた。

７－２　将来の職業で重視すること

将来の仕事を選ぶ上で最も重視することは、「職場の雰囲気の良さ（4.69）」で、「自分の適性を活かす機会（4.43）」と続く。短大全体と本学、学科分野別でも、この２つの重視度の順位は変わりない。学科間で差がみられるのは、「短大や進学先で得た知識・技能の活用(4.21)」であり、人文(3.94)や地域総合科学科(4.06)で低く、保健(4.48)や教育(4.42)で高かった。看護師や保育士などの職業資格の取得を目指す養成課程に対応した分野で学ぶ学生の重視度が高いといえる。本学では、英語科・食物科の重視度が短大全体（人文・家政）よりも高く、短大全体と比較して１割程度多い学生が、短大で獲得した知識や技能を仕事で活用することを重視している。本学は短大で学んだ知識や技能を活かせる職場への就職を期待している学生が多い短大だといえる。また、「昇進の見通し(3.74)」「社会的な評価(3.90)」「高い収入(4.03)」を重視する割合は低かった。

本学学生の重視度は、短大平均と比較しても全体的には大きな差はみられない。しかし、「高い収入(3.84)」を重視しない傾向が食物科(3.63)と保育学科（3.82）で特にみられた。地方・自宅通勤等の就職先選択の諸条件を勘案すれば，高い収入を望めないことを学生たちは意識しているのであろうか。

さらに「地元で働けること(3.57)」の重視度は、短大全体では最低であったが、本学の英語科(2.85)はさらに低く、この項目を重視している人はわずか30.8％であった。

また、本学の留学生の、将来の仕事を選ぶ上で最も重視する項目の選択傾向を日本人学生と比較すると、重視度の数値自体が全体的に低いことがわかった。留学生の大部分は短大卒業後に四年制大学等への進学を希望しているので、職業生活に対するイメージがまだ形成されていないのかもしれない。また、欧州やアメリカと同様、東南アジア（中国・韓国）の大学生も、卒業直後に就職することに対するインセンティブが日本人学生ほど高くないことを反映したものともいえる。つまり、本学の留学生は、卒業直後の就職を成功させることに重きを置いた日本人の職業観とは異なる就職に対する考えを持っているのである。

表７－１

		短大全体	本学	人文	英語科	家政	食物科	教育	保育学科	留学生
	N	7859	154	776	39	1947	38	2778	77	40
Ｅ３－Ｌ：職場の雰囲気の良さ	平均値	4.69	4.80	4.62	4.92	4.68	4.87	4.73	4.70	4.15
	%	93.6%	95.4%	92.3%	100.0%	93.2%	94.7%	93.8%	93.4%	66.7%
Ｅ３－ｂ：自分の適性を活かす機会	平均値	4.43	4.52	4.44	4.46	4.41	4.49	4.49	4.56	4.00
	%	89.4%	92.7%	89.0%	92.3%	88.7%	94.6%	91.2%	92.0%	64.1%
Ｅ３－ｉ：雇用と身分の保障	平均値	4.24	4.18	4.25	4.28	4.28	4.13	4.24	4.15	4.10
	%	81.8%	80.9%	83.5%	87.2%	83.3%	81.6%	80.7%	77.3%	79.5%
Ｅ３－ａ：短大や進学先で得た知識・技能の活用	平均値	4.21	4.37	3.94	4.15	4.10	4.34	4.42	4.49	4.18
	%	80.8%	87.5%	70.9%	82.1%	77.7%	86.8%	87.2%	90.7%	79.5%
Ｅ３－ｆ：余暇のためのゆとりがあること	平均値	4.17	4.04	4.05	4.08	4.18	3.97	4.19	4.05	3.87
	%	78.0%	74.3%	74.3%	79.5%	79.3%	71.1%	77.9%	73.3%	64.1%
Ｅ３－ｇ：仕事と家庭の両立	平均値	4.14	4.14	3.96	4.10	4.08	3.81	4.28	4.33	3.77
	%	75.9%	78.3%	69.8%	79.5%	73.3%	62.2%	81.2%	85.5%	66.7%
Ｅ３－ｅ：男女差別がないこと	平均値	4.11	4.19	3.99	4.13	4.08	4.21	4.18	4.21	3.64
	%	73.5%	76.5%	69.8%	74.4%	71.9%	76.3%	75.8%	77.6%	51.3%
Ｅ３－ｃ：社会に役立つ機会	平均値	4.08	4.08	4.02	3.95	3.99	3.62	4.25	4.37	3.95
	%	75.8%	75.7%	74.5%	74.4%	71.2%	56.8%	82.8%	85.5%	69.2%
Ｅ３－ｈ：高い収入	平均値	4.03	3.84	3.99	4.08	4.07	3.63	4.02	3.82	3.92
	%	74.2%	67.3%	75.0%	89.7%	75.7%	55.3%	72.5%	61.8%	71.8%
Ｅ３－ｊ：社会的な評価	平均値	3.90	3.89	3.85	3.79	3.92	3.61	3.96	4.08	3.82
	%	67.3%	67.1%	65.8%	66.7%	67.7%	52.6%	69.5%	74.7%	56.4%
Ｅ３－ｋ：昇進の見通し	平均値	3.74	3.76	3.71	3.97	3.78	3.63	3.74	3.72	3.95
	%	58.9%	63.2%	59.7%	79.5%	61.1%	55.3%	58.4%	58.7%	69.2%
Ｅ３－ｄ：地元で働けること	平均値	3.57	3.41	3.23	2.85	3.50	3.29	3.79	3.76	3.72
	%	54.9%	50.3%	44.7%	30.8%	52.2%	42.1%	61.9%	64.5%	59.0%

（平均値：5段階の平均、％：4と5（重視する）を選んだ割合）

７－３　望ましい生き方　人生で重視すること

望ましい女性の生き方では、「結婚や出産時に仕事を辞めるが、子どもが一定の年齢になったら再び仕事に就く (仕事中断再就職)」が、短大生には最も支持され６割を超えて（62.8％）いる。「結婚や出産にかかわらず仕事を続ける (仕事継続)」は２割程度、「結婚出産で仕事を辞める（家事専業）」は１割に満たない。現在の若年層にはジェンダー意識の再燃が見られるというが、１０代～２０代前半が大多数を占める短大生が、女性は結婚や子育てのために仕事を一旦中断するのが望ましいと考える傾向が強いことはその表れといえるであろう。学科分野別では、人文・教養分野に仕事継続派が平均よりも１割ほど多かった程度で、学科分野間における相違はほとんどみられなかった。

本学では、保育学科で仕事継続支持派が３割を超えていたが、食物科 (11.4％) と英語科 (15.8％) では低率であった。また、留学生は「結婚しないで仕事を続ける」を選択した者が３割であった。

今人生で最も重視することは、「楽しい毎日の生活 (63.4％)」であり、「家族や身近な人との生活 (13.6％)」「健康であること (8.4％)」「豊かな経済力 (8.2％)」や「仕事での成功 (7.8％)」よりも大変高い支持率であった。この傾向は短大全体の学科分野間、短大全体と長崎短大間でも変わりがなかった。

しかしながら、本学の留学生の４割は「仕事での成功」を最も重視していた。

８．調査の考察とまとめ

本「短期大学在学生調査」に関する詳細な分析（二次分析）結果については，今年度（２２年度）以降の関連学会での発表や、調査報告書刊行で対応していく。

それに先立つ本稿のまとめとして，当論文のサブタイトルである「全国調査との比較から見えた本学教育の傾向と対策」について，以上に述べた、調査の一次分析結果を素に論じてみたい。

前提

1．本学の①学びへのアクセス、②学習のプロセス、③アウトカムは、日本人学生と留学生の間で大きく異なる。

2．日本人学生で，なんとなく短大へ進学したというモラトリアム層は少数派である。家庭の経済事情を考慮した上で相応・相当の負担を覚悟して進学してきた。そのため，卒業後には本学で学んだことを活かして正規職等，安定した職場を得ることを希望している学生が大多数を占める。よって、彼らに必要な教育は，職業への円滑な移行を促進する広義のキャリア教育である。

3．留学生の大多数は，卒業後に日本国内の大学への進学・編入を希望している。つまり、日本の高等教育参入のためのファーストステージの役割を本学に期待しているのだが、本学の②と③は彼らのニーズに必ずしも的確には応えていない。

【本学日本人学生の特徴と教育改善への視点】

1．高等教育を受けるために必要な入学前の学習経験が質・量共に不足している。机上での反復・継続学習の習慣確立が急務である。授業を聞く，授業内容を整理する、知識やスキルを定着させるために反復練習をする、定着したかどうかを確認するという，学習プロセスの習慣を身につけることが必要である。それには、知識や技能の定着確認をできるだけスモールステップで行うことと、グレード制、GPA 等を細かく取り入れて，学習に対するインセンティブの保持と伸長を図らねばならない。

2．高校までの学びの中での挫折経験が少ないので、学びの有用性は素直に理解している。これまでの学びは学校や教師によって与えられるものであり、生徒として「面白いか」「役に立つか」の基準で学習内容を判断してきた。大学教育に必要な自ら学ぶための構えは、学習経験不足のために十分に形成されていない。

3．職業に直結する学びに対する親和性が高く，実習体験など実務型教育へのニーズは高い。しかしながら、実体験重視・現場即応の教育が機能するかどうかは、継続・反復学習によって積み上げた専門分野の基礎知識や技能の習熟度レベルで決まる。巷間でいう「地頭力」とも言い換えられるが、基礎の形成が脆弱のままであれば、現場（実習先・就職先）という現実社会に出た時に挫折する可能性が高い。これを防ぐためには、在学期間を通して、基礎、概念、理念という一見，面倒くさそうに見えるものを丁寧に確認する態度を形成する教育を実施する必要がある。

4．アカデミックな学習内容と実学教育をいかに上手にブレンドしていくかが，短期大学教育の方法論のメインテーマであり、おそらく、職業資格を取得するための養成課程、大学編入等の継続教育など、学科分野別の特性によってこのブレンド方法は異なる。また、同じ学科分野であっても、入学してくる学生の特性は短大毎に異なる。学生をよく見て、細かに工夫をする必要がある。本学では、食物科と保育学科の学生は、職業にかかる専門分野の実践的な学びを強く求めている。よって、その専門分野に関連性の高いアカデミック・コンテキストに関する精選を行い，職業現場に求められるアカデミック・コンテキストという位置づけで教育課程を編成しなければならない。特定の資格養成系の学科ではない英語科においても学生は実学教育を求めており，長年、英語科においては実学教育への対応を行って一定の成果をあげているが、留学・進学・一般職就職など多様な卒業後の進路をとる英語科として必要なアカデミック・コンテキストに関して、最低基準を明確にする必要がある。

5．本学の英語科には、進学先を短大か専門学校かと高三の時に迷った学生が多い。就職に直結す

る（というイメージのある）専門学校への関心は、限定的であっても、高校時代から就職や職業に対するイメージが形成されていることを物語っている。このことと裏表の関係になるが、四年制大学志向は、他の短大の人文分野と較べて低い。言い換えると，四年制大学に学力不足で入れなかったので、仕方なく本学へ入学したという学生は少ないのである。一般的に、不本意入学者の割合が低い高等教育機関の教育効果・成果は高い，また、出やすいといわれる。つまり、本学英語科には、教育のしがいのある学生が多数存在するということである。

6．進学理由が、自宅から通えることや経済的な理由であるという学生を「不本意入学」者とみなす考え方がある。さすれば、５とは逆に、本学は他の短大よりも不本意入学者の割合が高い短大ということになる。確かに、これらの進学理由を選んだ学生の中には、家庭の事情等を考えると本学以外の選択肢はなかったが、事情が許せば本学以外の学校に進学したかった者が数多くいるはずである。また同時に，自宅から通える学校があったからこそ進学することができたと考えてもいるであろう。したがって、この２つの進学理由は、本学を進学先に選択する際の肯定要因とも否定要因ともとれものであり、このような二律背反する意味付けのある進学理由についての解釈は難しい。ひとりの学生の中でも、時と場合によって、肯定要因に思えたり、否定要因に思えたりする。要は、肯定要因としての度合いを高めるように、彼らの教育全般に対する満足度を高めていくことが肝要である。つまり、本学へ進学したことは、自分に与えられた環境の中でのベストチョイスであったと学生ひとりひとりが卒業時に確信することのできる教育内容と学生支援の提供が必要である。

7．半年間の本学での学習活動を終えて、保育学科の学生たちはアルバイトを含めた私生活にも授業にも自己評価では積極的な関わりを示している。しかし英語科や食物科の学生の中には、他の活動と比較してみると、まだ授業に関係する勉強そのものに積極的に取り組む姿勢を見せていない者たちが半分近くいる。ところが、授業への出席率は３学科とも非常に高く、アルバイトなどで授業を休むという態度をとることもほとんどなく、家族からの精神的な応援も大きい。客観的な１週間当たりの合計時数では、食物科が最も多く授業に関係する勉強をしているという結果も出ている。すなわち、英語科と食物科の学生は、授業にはまじめに出ているが、そこで自分が一生懸命がんばっているという実感を持っていないということになる。英語科は座学が多く、食物科は実習が多い、という授業形態に何らかの原因が考えられるのかも知れないが、そう言ってしまっては、今度は逆に保育学科の学生たちの授業に対する積極性を説明することができない。さまざまな要因が複雑に絡み合っていることは十分承知した上で、キャリア教育・職業教育を踏まえた将来への展望を彼らにきちんと自覚させることが、一つの解決法になることは間違いないだろう。そのためのプログラム作りは早急の任務である。食物科をはじめ、ほとんどの学生にとって社会へ出て行くための最終段階である本学の教育で、「短大での授業を何のためにしているのかわからなかった」と考える学生を、一人でも出してはならない。

8．教育課程に対しても学生支援に対しても、本学の学生たちは短大全体や各分野全体よりも高い満足度を示したが、そのことだけで学生たち自身の将来を保障することにはならないだろう。知識・技能・態度の変化でも、彼らは一般的な常識や礼儀・マナー、専門的な知識や技能という短期大学卒業生としての二大タイトルを獲得しつつあると自己評価しているが、それを確実に社会的・職業的自立へとつなげていくためには、まだまだ多くの課題がある。例えば彼らが高まったと感じている一般常識等が社会が求めているものと一致しているかどうか、また獲得したそれを社会でうまく使うことができるかどうか、短大で得た専門的な知識や技能を、実際

の職業でのコンピテンシーとすることができるかどうか、あるいはまたコンピテンシー向上につなげることができるかどうか、などである。教職員側は教職員側で、例えば、専門的な知識や技術を身につける授業に学生から高評価を得たからといって鵜呑みにはできないだろう。その評価の客観性やその授業の成果とのギャップの有り無しも、どこかで確認する作業が必要である。このように考えると、今回の結果の中で、本学学生が授業以外で教職員と接する機会を多く持ち、教職員から精神的なケアや励ましを多く受けている、と回答していることが大きな意味を持ってくる。学生たちからの生の声を教職員が積極的に吸い上げることができるわけであるから、細かいプロセスの途中途中で折に触れて、教育課程・学生支援などに対する紙の上での評価と実際の生の評価との擦り合わせをするチャンスを多く持てることになる。すなわち紙の上での「評価５」の意味、「評価２」の意味を実際に手にして、しっかりと握りしめて眺めることができ、次の授業や行事等へと生かしていく自己点検にもつながってくるからである。

～○～

留学生の実態については紙幅の関係で詳しく触れることができなかったため、後日、稿をあらためて報告したい。

参考文献

安部恵美子他 2008『短期大学卒業者のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究』平成16～18年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1）　課題番号16330170）研究成果報告書

注）本報告で使用したデータは、平成21年度科学研究費補助金「短期大学教育とステークホルダーに関する総合的研究」（基盤研究（B）課題番号21330195、研究代表者：安部恵美子）の助成を受けて行った調査のものである。データの数値は2010.3.31現在の速報値である。